掲載日:2017年08月14日，面名:社会，記事ID:KIJ20170814_01003000100206008
(C)下野新聞社　無断複製転載禁止。

ヒロシマに生きる 中
被爆地の本県関係者

伝え続ける使命 胸に

古沢 知子さん＝アナウンサー（鹿沼市出身）

「平和に対する温度差を痛感」

21年前の8月6日。初めて足を運んだ、その日の広島・平和記念公園の光景が脳裏に焼き付いている。原爆死没者慰霊碑に手を合わせる人の長い列、あちこちで漂う線香の煙。一帯が追悼の祈りに包まれていた。

「平和に対する栃木と広島の温度差を痛感した」。

鹿沼市出身のテレビ新広島アナウンサー古沢知子（ふるさわともこ）さん（44）は静かに目を閉じ、振り返った。

「悲劇」に言葉失う

都内の大学を卒業し、就職した1996年。先輩から「報道に携わる者として式典当日の雰囲気は知っておくように」と諭された。

「原爆の日」に同公園で営まれる平和記念式典はテレビ中継で見たことはあった。漠然と「戦争はいけない」と考えていた。

だがテレビ中継では知り得なかったヒロシマが、そこにはあった。

夜明け前の午前4時。慰霊碑近くを歩くと、既にお年寄りの姿が多くあった。涙を流し、苦悶（くもん）の表情を浮かべる人たち。「話を聞かせてください」。衝動的に駆け寄り、頼み込んだ。

語られる「想像を絶する悲劇」に言葉を失い、認識の甘さを思い知った。報道人の「伝える使命」を胸に刻み、新人時代はニュースキャスターとして平和報道に携わった。

感じた「温度差」は、他にもある。

子育てを通して、平和教育の充実ぶりに驚いた。多くの学校が夏休み中の8月6日を登校日とし、式典をテレビで見て黙とうし、被爆者の体験を聞くなどして子どもたちが平和の尊さを学ぶ。

街を歩けば「至る所に教材がある」。つい最近も「家のそばに『シュモーハウス』というのがあって、娘と何だろうねって話していたんです」。調べると、米国の森林学者フロイド・シュモー氏（故人）が、家を失った広島の人々のために造った建物を移転・改修した施設と分かった。

広島と栃木つなぐ

栃木の魅力を伝える「とちぎ未来大使」の顔も持つ。かつて担当した同局の番組内の企画「伝説のご近所さん」では、イモフライや鹿沼土、益子焼などをPRし、橋渡しに一役買った。

広島と栃木をつなぐ古沢さん。「平和の尊さをどう伝えるべきか」。自問しながら、今日もカメラと向き合う。

「平和の尊さ」と「伝える使命」を胸に仕事と向き合うアナウンサーの古沢さん＝テレビ新広島